刊行にあたって

金　潔（専攻長）

2022年は、大正大学大学院社会福祉学専攻（以下、本専攻）が、1997(平成10)年に文学研究科の修士課程として設置され、のちに博士課程の福祉・臨床心理学専攻が開設されてから、四半世紀を迎えた節目の年である。2023年2月11日（土）の創設25周年記念集会は、「創設期の大学院教育を振り返る～大正学派の継承を～」をテーマに、本専攻と大正大学社会福祉学会との共催で開催された。大学院修士課程第1・2期生の3方に、「吉澤英子先生との出会いを考える～教えていただいたこと・問われてきたこと」、「社会福祉実践分析研究（障害班）の活動から」、「創設期の社会福祉実践分析研究（高齢班）の活動から」をテーマに、当時のことを振り返っていただいた。参加者たちにとっては、「社会福祉実践分析研究」という授業が試行錯誤を繰り返しながら展開してきたことや、実践分析研究報告書の位置付けについて知る良い機会となった。私は初代専攻長吉澤英子先生の「研究と実践を時計の振り子のように」という言葉をよく記憶しており、実践をどのようにして理論として構築するか、また構築された理論を再び実践に生かす、その繰り返しによりレベルアップが求められると考える。大正学派とは何か、私たちはこれまでの先生方からの教えを受け、それを継承できるようにしなくてはならない。

さて、今年度の実践分析研究報告書が無事完成した。Ⅰ部では、修士課程院生3名が、「児童養護施設入所児童の意見を聴くことの現状と課題―児童養護施設職員へのインタビュー調査を通して―」、「認知症高齢者の社会参加に関する研究」、「介護老人保健施設におけるレクリエーションの実態～介護職員の意識調査～」を研究テーマにそれぞれの研究経過をまとめている。あわせて、3名の科目等履修生のコミュニティソーシャルワーカーの「精神障害の疑いのあるひきこもりの女性への支援」、「さまざまな課題のある外国ルーツのひとり親家庭へのアプローチ」、「豊島区民社会福祉協議会の職員教育と指導方法の考察」をテーマにした寄稿論文を載せている。Ⅱ部には、修士課程修了生4名が執筆した研究成果報告書（修士論文）の要旨を掲載している。Ⅲ部は、招聘講師講義の成果報告書である。

最後に、本実践分析研究報告書は昨年度分からオンデマンド発行となった（「大正大学機関誌リポジトリ(https://tais.repo.nii.ac.jp/)」）。より多くの方に、ぜひ研究成果をご一読いただき、今日の福祉問題に関心を寄せていただきたい。